

まなざしを取り戻す：構造の中の私と社会学的想像力

里村，和歌子

<https://doi.org/10.15017/7388819>

出版情報：大学院からはじめる社会学研究：問いを鍛える作法：三隅一人教授退職記念論集，pp. 44-55, 2025-10-01. 三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン：
権利関係：



まなざしを取り戻す

—構造の中の私と社会学的想像力—

Reclaiming the Gaze: The Self in Social Structure and the Sociological Imagination

里村 和歌子

◎本章のねらい

大学院から社会学に取り組もうとする学生、学卒後に時間を経て進学する方、あるいは自身のこれまでの経験が不遇であったと感じる方などに向けて、著者の自分史をとおして、個人史と構造を往還しながら問いを鍛える社会学的想像力のプロセスを描き出す。そうすることで、経験を社会的問いへと転換するための道筋を提示したい。

◎とくに読んでほしい人

あなたは日々、言葉にならない憤りや不安を抱えている。それは一体どういう理由か謎に迫りたいと思うが、学問としてどう結びつけてよいか見当がつかない。

1. 社会学との出会い

必ずしも社会学を学んで来たのではない大学院進学者に向けた学術的論考を集めた本論集であるが、自分語りがつづくのをしばらく許してもらいたい。なぜなら、私は「個人史と歴史、そして社会における両者の交差という問題に立ち戻ることなくして、社会をめぐる研究はその知的冒険を全うすることはできない」(Mills 1959=2017: 21)という社会学想像力が社会学にとって決定的に重要であるという立場に立つからである。

私は9歳からシングルマザーの家庭で育った。1946年生まれで6人兄弟の3番目として生まれた母は、兄弟のなかで唯一大卒資格をもっており、勉強ができて明朗快活、どこでもムードメーカーになってしまうような明るい人だった。地元の教育大学に進学し1学年上の父と結婚、教員免許を取り教員となるがすぐに独立し、夫婦で学習塾を経営していた。第二次ベビーブームで生まれた子どもたちが受験を見とおす時代ということもあって、なかなか羽振りもよく、父は革ジャンを着て黒光りするスポーツカーと二輪車に乗っていた。しかし私が7歳のときに姉が病死、不幸を嘆いた両親は2年後に離婚、母は生活のために

就職したが、90年代以降の不況のあおりを受け、生活は苦しかった。

私がそんなときに出会ったのが、社会学という学問であった。なぜ母と私は貧困に生きているのか、なぜ別れた父は転職を繰り返しているのか、なぜ私は高校教師から卒業文集をあげつらわれ、犯罪者になったときに参照されるから気をつけろと注意をされなければならないのか、それまで私は、それらの仕打ちは両親や自分の責任、ないしは宿命であると考えてきたのだが、進学後はじめて社会学という学問に触れたとき、雷に打たれたような衝撃を覚えた。

そこで出会ったのは鶴見俊輔の『人が生まれる』であり、見田宗介の『まなざしの地獄』、ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』、バーガーの『社会学への招待』西澤晃彦の『隠蔽された外部』などであった。鶴見の作品では金子文子の寄る辺ない人生に自分を重ねた。見田の作品ではNという死刑囚、ウィリスの作品では野郎どもという労働者予備軍、西澤の作品では寄せ場労働者や日系人労働者など、どの著作にも周辺に置かれた人びとが登場するのであるが、彼ら彼女らは生まれながらにそうなったわけではなく、社会の構造や世間のまなざしが彼ら彼女らをそうみなし、自らもそう形成せざるを得ない状況になっていったことを知った。そのとき、私ははじめて自分や自分の家族を肯定してあげられるような気がした。まさにバーガーのいう社会学の魅力、「今までの人生を通じて生きてきた世界を、社会学の視界によって新しい光の下で見直すことを可能にしてくれ」た瞬間だった（Berger 1963=1995: 34-5）。

そんな折、母が末期がんと診断される。大学進学で地元を離れていた私は、母を病室に残し、地元の市役所の生活保護申請の窓口に行った。中年で小太りの男性職員は何の用紙ももたずにやって来て、私が大学にかよっているのに申請なんてと取りつく島もなかった。確かに私はそれまで大学を中退して働くという考えはまったくもっていなかった。それから二ヶ月ほどして母は死に、わずかながら死亡保険金が入ったことで、私はなんとか大学を卒業することができた。

このように、私の定位家族は大卒の両親と姉と私という4人の標準家族であったはずが、姉の死をきっかけに脆くも崩れ去り、私はあったはずの選択肢を失っていた。そして私は卒業後、すぐに結婚し、生殖家族を形成することになったのである。

このときの私の社会的な「問い」とは何か。私はまだ迫りくる圧倒的な現実に取り囲われており、学問的な発想に至ることは難しかった。しかし、「一方で世界において起こっていることを把握し、他方で社会における個人史と歴史とが交差するささやかな地点として

の彼ら自身において何が生じているのか」を人びとは理解すること望む（Mills 1969=2017: 23）。私がこのときに学んだ、社会学の基礎的な考えかたは、私の血肉となって思考と生きかたを水路づけていった。

課題 1) あなたがこれまでの経験をとおして抱いた疑問のうち、社会に関連がありそうだと感じる出来事を3つピックアップしてみよう。

2. フェミニズムとの出会い

少し時間を遡るが、学部時代のもうひとつの重要な出会いがフェミニズムであった。貧困であることにくわえて女子であることは、私に特定の生きにくさを与えていた。そんなときに集中講義に来たのが、摂食障害についてフェミニズムの観点から論じた『女性はなぜ痩せようとするのか』（1996）を執筆した浅野千恵先生だった。「美しい」、「かわいい」自分でいたいという、自分を大切にするための行為が、かえって自分を制限してしまうという矛盾した状況について、摂食障害の当事者たちへのインタビュー調査をもとに論じた本が出版されたばかりだった。私はそこでジェンダーという概念を知り、はじめて自分の置かれた状況が言語化され、またたくまに整理されていくことに衝撃を覚えた。それまで私は長いことロングヘアーにしていたのだが、すぐにショートカットにし、履いていたヒールを脱ぎ捨てた。さらに当時話題をさらっていた『ジェンダー・トラブル』の読書会を友人たちと開き、上野千鶴子に関する著作からケンカを学び、『サバルタンは語ることが出来るか』や『月が赤く満ちる時』などポストコロニアルフェミニズムにも触れた。私は、自分はフェミニストであるというゆるぎのないアイデンティティをもっていたし、周囲にそれを公言していた。

ところが、である。学卒後に結婚したことによって、私はいつのまにか世間から主婦とみなされるようになっていった。私は自称社会学徒として、この状況について把握したい衝動に駆られ、近所にあったピカピカの男女共同参画センターに併設する図書室でジェンダー論の本を漁った。そして私は息を呑んだ。学生ときは気づかなかったのだが、専業主婦は理論的にも実践的にも「最もワリの悪い選択肢」、「援交と新・専業主婦は、家父長制につく白アリである」など主婦を揶揄する言説が踊り、かつてフェミニストだった私はいつのまにかフェミニストの反対側にいることを知った（上野・小倉 2002: 158; 280）。

村田によれば、1990年代に入ると長引く不況のもと、就労せず自立しない主婦であることはリスクであるとみなす言説が登場しはじめてきた（村田 2023: 188）。1990年代後半か

ら 2000 年代にかけて、『ふざけるな専業主婦』（石原 1998）、『くたばれ！専業主婦』（石原 1999）など挑発的なタイトルの書籍や、「新・専業主婦論争」（中公新書ラクレ編集部 2002）など論争的な書籍が相次いで出版された。猪瀬直樹が政府税調で述べた「パラサイト・ウィフ」、さらに同じ猪瀬による「ニート主婦」（『アエラ』2005 年 8 月 1 日号）という新語が如実に示すとおり、新三号被保険者制度をはじめとする専業主婦の「優遇」施策が批判され、専業主婦がいなくなれば税収も増え経済も社会もうまくまわるのだという主張が研究者を含め聞こえてくるようになった、そんな時代だった。

2003 年に子どもが生まれると、そこに母という役割もオンされることになる。目の前の子どもは天使みたいに可愛いのに、世間からの母という呪縛が重くのしかかり苦しくてしかたがなかった。その状況から少しでも逃れようと、大学院に進むか、フルタイムの仕事に就くかで迷った。しかし 2000 年代前半、待機児童が溢れる福岡市の保育所では、通学という理由で子どもを預けることはほぼ不可能であると聞き、少し経験のあった編集の仕事を選ぶこととなった。しかしそこでもワンオペの子育て女性が独身の男女と肩を並べて働くことの厳しさを痛感する出来事ばかりで、結局、解決の緒はまったく見出せずに退職することとなった。

学生時代に学んだことと現実との乖離は、私に日々矛盾を感じさせ悩ませた。もしかしたら学問なんて、最初から学ばなければ良かったのではないか。社会学、ならびにジェンダー論の考えかたを脳内から消しゴムで消せたらどんなにラクかと、いつも、真剣に考えていた。

そんな私を学問の道に再び向かわせるきっかけとなったのは、とても些細なことである。あるとき中国語を学ぶために紹介してもらった中国人の青年が、自分の肩書を「大学院生」と名乗ったとき、子育てと仕事のなかですっかり忘れていた大学院という選択肢が急速に脳裏に浮かんた。日々私を引き裂こうとする学問に復讐するチャンスなんじゃないか。あと一年で子どもも小学生だ。そして私はすぐに準備をはじめ、翌年、自宅から一番近い大学院に進学することになった。

3. 専業主婦のしんどさを問う

大学院に入り直したときのまずはじめの問いは、**なぜ専業主婦はしんどいのか**というものであった。2000 年代前半の日本の言説状況は、先述の専業主婦バッシングがなされる一方で、キャリア未婚女性の自己肯定を描く『負け犬の遠吠え』をめぐる議論も話題となっていた（酒井 2003）。そこでは、著者の酒井を含むキャリア未婚女性を一旦落として上げるため

の手段として、専業主婦は社会的に「勝ち組」であるというアイロニカルなラベリングがなされていた。これについて妙木は第 6 次主婦論争と位置づけており、戦後日本で第 1 次から第 3 次までの主婦をめぐる起こった論争が、主に既婚女性たちによる論争であったのに対し、第 4 次以降は未婚女性たちによる議論という大きな違いがあると述べている（妙木 2009）。つまりこのとき主婦は多数派としての自明性を失っており、顔の見える主婦が不在のなかで、主婦イメージのみが動員されバッシングされ、未婚女性の自己肯定の手段となっていたということである。一方で、少なくとも自分や自分の周りには主婦たちは確かに存在していたということである。そしてこのような言説状況を含むこの状況を解き明かしたいというのが修士論文の執筆動機である。

修士課程では、マルクスの『共産主義者宣言』や上野千鶴子の『家父長制と資本制』、ベル・フックスの『アメリカ黒人女性とフェミニズム』の精読をとおり、資本主義が家父長制や奴隷制、植民地主義と結びつくことで、固有の支配体系を編み上げ、女性、黒人女性、植民地の女性たちを搾取する構造が地域によって形を変えながら作り上げられていることを学んだ。そしてジェンダー論を学ぶゼミでは『ジェンダー・トラブル』や『男たちの絆』など、ジェンダーが異性愛秩序を維持し、その元に、その秩序に加担する規範を内面化するマジョリティがいること、そしてささやかながらパフォーマティヴィティという抵抗の糸口を学んだ（Butler 1990=1999）。

くわえて、『ジェンダー・トラブル』に至るまでに積み上げられたフェミニズムの歴史を知ったことも私にとって大きな収穫だった。1960 年代から 70 年代にかけて世界中で巻き起こった第二派フェミニズムのうねりのきっかけとなったのは、なんと、主婦の悩みであったのである。その悩みとは、アメリカ中産階級高学歴白人女性たちの「得体のしれない悩み」

（The problem that has no name）である。1963 年に出版された直後、100 万部を超えるベストセラーとなったフリーダンの『女性たちの神話』（邦題は『新しい女の創造』）は、それまで結婚か就職かの選択に悩まされ、男性を出し抜くような成功を収めてはいけないというジレンマを抱く高学歴白人女性たちの共感を集め、第二波フェミニズムという大きなムーブメントにつながっていった（岡野 2024: 31; 落合 1994=2004 :138）。のちにフリーダンは「全米女性機構 National Organization for Women」（NOW）の初代会長に就任し、リベラル・フェミニストとして全米の女性運動を牽引していくことになる（岡野 2024: 31）。

『女性たちの神話』は、次のような悩みの描写からはじまる。

「長い間、ある悩みがアメリカの女性の心の中に秘められていた。二十世紀の半ばになって、女性たちは妙な動揺を感じ不満を覚え、あこがれを抱いた。郊外住宅の主婦たちは、だれの助けも求めずにひそかにこの悩みと戦ってきた。寢床を片づけ、食料品を買いに出かけ、子供の世話をし、夜、夫の傍に横になる時も、「これでおしまい？」と自分に問うのをこわがっていた」(Friedan 1963=1986: 12)

第二波フェミニズムは「個人的なことは政治的なこと」というスローガンのもと、家父長制や資本主義などの構造を基盤とする公私の分離、さらには私的領域における女性の家庭役割を疑う運動として発展した。主婦たちの、言葉にならない、漠然としたこれらの悩みは、そのための原動力となったのである。一方でベル・フックスをはじめとするブラックフェミニズムから、「女性について論じられるときは、たいてい白人女性にスポットライトが当てられる」と運動の白人中心主義が批判されてきたことをつけくわえる必要があるが(hooks 1981=2010: 20)、当時の女性たちに与えたインパクトは無視することはできない。

そして、フェミニズムの歴史を学びはじめて改めて私は思ったのだ。フリーダンの著作から半世紀を経て、アメリカではなくこの極東の地で、主婦の悩みがほぼ変わらないのはどういうわけなのかと。なぜ専業主婦はしんどいままなのか、これこそが私の修士論文の問いとなり、現代日本における主婦の主観的意味世界を知るために調査を行ったのが修士論文であった。そして、そこから次への問いへとつながる発見があった。それは、調査協力者である、ある主婦の漠然とした悩みが、パートをはじめたことで目覚ましく霧散したという事実であった。

4. ジェンダー論における問いを鍛える

つづいて入学した九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程では、はじめに直野章子先生、つづいて三隅一人先生に指示を仰いだ。三隅先生から「社会学では不安を扱うのは難しいのではないか」というアドバイスをいただき、これまで焦点を当ててきた個人の内面ではなく、具体的な相互行為が観察できる中間集団に目を向けたいと思った。そんなとき、大学の帰りに寄ったイオンモールの通路で出会ったのが、「作家さん」だった。眼の前には、「得体の知れない悩み」を抱く主婦とは対照的に、小さなブースで楽しそうに談笑する同世代の女性たちがいた。**なぜ、彼女たちは楽しそうなのか？**それが次の問いとなった。

さっそくホストパーソンにその日のうちに挨拶をし、調査をしたい旨を口頭で伝えた。そ

の後もイベントのたびにお邪魔して、店番をしたり子守をしたりしながら観察を続けると、やはり彼ら彼女らは楽しそうであるし自分も楽しいのである。しかし、楽しそうな理由を探るだけで終わってしまっただけでは研究にならない（三隅 2025: 184）。修論と新たに取り組もうとするテーマをつないでくれそうな研究を手当たり次第探し、ようやく私は、メインとなる先行研究を探し当てた。それは、山崎明子氏の『近代日本の「手芸」とジェンダー』である。そこでは、手芸はジェンダー化され価値をもたないと論じられていた。しかし目の前の主婦たちはそれを売っている。この研究に出会ったことで、私の問いは変化し、マルクスの交換価値論を参照しながら、ジェンダー論において使用価値はもつが交換価値をもたないといわれてきた女性たちの手芸のなかで、「作家さん」の作品が交換価値をもつ理由は何かという問いに変わった。

そこでその問いに答えるためのヒントとなったのが、調査協力者である、ある人気帆布作家の語りだった。彼女は、客や取引先のショップ等から生産量を増やすことを求められても、生産を最大限にすることをせずに、その申し出を断っていた。例えば人を雇ったり、制作時間を長くしたりして生産量を増やすことはできなくもないが、それはしたくないのだと語った。その理由として挙げたのが、ファンとの交流や自分の作品と向き合う時間を大切にしたいという思いだった。つまり、大量生産・大量消費では適わない顔の見える関係性こそが「作家さん」の作品に交換価値を生んでいるのだ。そしてそれはパートレベルにはお金を稼ぐ手段となっている。とはいえ芸術家である「作家」のように高額になるわけではなく、あくまでも親しみやすい「さん」という呼称を伴う「作家さん」の作品である。「作家さん」が帯びる主婦性、素人性が価格を抑え、彼女たちの商品を買叩いているともいえるのであるが、中年女性労働者の労働市場における市場価値を考えれば、作家業は飽くまでも自分のペースを保ち、自律的で主体的な労働を叶える手段のひとつであり、当事者にとってはそれなりの納得感を得ていることが語りから読み取ることができた。

彼女たちの労働者でもなく主婦でもない中途半端な領域での活動は、それまで先行研究で論じられてきた生産労働／再生産労働、公共領域／家内領域などジェンダー・イデオロギーによって恣意的に引かれた境界線の間にあるマージナルな領域で行われていた。私はそこで行われる活動をオルタナティブ労働として名付け、二元論分離の間にある労働のひとつの可能性として示したのである（里村 2020）。

課題 2) 課題 1 で考えた 3 つの出来事について、社会学の問いが見つかりそうな出来事をひとつ挙げてみよう。その理由について説明し、学術的な問いとして提示できるだろうか。

5. まなざしを取り戻す

しかし、ここまで議論を進めてきたにもかかわらず、修論の調査で得た、「なぜ主婦はパートをすると悩みが霧散するのか」という問いには、まだ真正面から答えられていない。そしてこの問いは、私が博論をとおして魅了されてきた「作家さん」研究とも深くつながっている。すなわち、「作家さん」が楽しそうに見えるのは、自分が好きなことを仕事にし、主体的に労働し、なおかつそれでお金を稼いでいるからにほかならない。けれどもそもそもなぜ、お金を稼ぐことがそんなにも人を楽しそうに見せるのか、自明に思えるその問いに、私はそれまで踏み込んで論じてこなかった。

お金を稼ぐと楽しくなる——そう聞けば、あまりにも当たり前のように思えるかもしれない。実際、私自身、お金はないよりはあったほうが良いと感じる。好きなものを食べ、好きなものを買い、好きな場所へ旅をする。そうした自由は、お金によって簡単に実現可能となる。だが、その後の調査で協力してくれた主婦たちの語りから見えてきたものは、もっと微細で切実な動機だった。彼女たちにとって、自分で（ほどほどの）お金を稼ぐという行為は、単なる経済的自由の獲得ではなく、配偶者との立場を対等と感じさせ、自己肯定感そのものにつながっていたのである（里村 2024）。

ナンシー・フレイザーが指摘するように、「蓄積の新形態は女性の賃労働の上に築かれている」（Fraser 2009=2011: 46）。家計補助として労働市場に駆り出された女性たちは、非正規という形で周縁化されつつも、資本主義を支える担い手となっている。そして皮肉にも、彼女たち自身はそうした賃労働によって自己肯定感を得ているのである。

こうした構造は、ウェンディ・ブラウンの新自由主義批判を参照することでより明確になる。ブラウンは、新自由主義的合理性の核心として、「市場モデルを全ての領域と活動へ——貨幣が問題ではない領域であっても——散種し、人類を市場の行為者であり、つねにどこでもホモ・エコノミクスでしかありえないものとして設定する」（Brown 2015=2017: 27）点を指摘する。これは、私的領域やケア労働といった経済の外部に見える領域までが、市場的価値観に包摂されることを意味する。とりわけ、「女性が家の内と外とであらゆるたぐいのケアを供給する責任を負っている」現実、社会基盤の解体を試みる新自由主義に対し、女性

がその「目に見えない基盤」として機能させられていることを示すのだとブラウンは指摘する（Brown 2015=2017: 120）。

このブラウンの指摘を踏まえれば、調査協力者である女性たちは、家父長制によってケアを当然のように担わされながら、社会の基盤として市場的価値観に包摂され、わずかな賃金で「配偶者と対等になれる」と喜んで市場に回収されていく。このようなジェンダー化された分業は、表層的には「自由」や「自律」を掲げるが、実際には性的差異を前提化しているのは明らかである。そして、新自由主義的合理性は、貧困層、特にシングルマザーを「責任化された新自由主義的主体になるプロジェクトの失敗」として切り捨てるのだ。「自由」なのだから、失敗したのはお前の責任であると。こうして「自由」はむしろ女性を市場の外部に縛り、「新しいかたちのジェンダー的従属化」へと転化するのだとブラウンは鋭く指摘する（Brown 2015=2017: 121）。

このようにブラウンは、新自由主義が家父長制に基づくジェンダー役割、すなわちケア役割の非対称によって市場の外部であったはずの私的領域においても女性たちを縛りつけていると論じた点で極めて重要である。繰り返しになるが、我々の生きる社会の基盤が脆弱になるなかで、女性たちはケアという愛情の名のもとに「目に見えない基盤」として内実ともに市場的価値観に包摂されているということを喝破したのである。

これらの議論を踏まえれば、お金を稼げば悩みが霧散する調査協力者の女性たちはいわば“新自由主義的家父長制”を内面化しその構造のなかに回収されているホモ・エコノミクスであるという読みかたもできるかもしれない。だが、それだけで語ってしまうことに注意が必要であろう。ミルズがいうように社会学的想像力とは「内面的環境と広範な構造的枠組みとの相互作用」（Mills 1959=2017: 273）の把握なのだとしたら、その解釈はあまりにも一方的で閉鎖的であるともいえる。構造の中に位置づけられながらも、そこに生きる人々は完全に受動的な存在ではなく、ときにその構造を再解釈し、ずらし、彼ら／彼女らなりの意味づけを与えて主体的に生き抜いている。個人と構造は、終わることなく相互に作用を及ぼし合っているのだ。

ここで再度母の話を持ち出すことを許してもらいたい。私の母はどうだっただろうか。シングルマザーになったあと、必死で仕事をして生計を立て、児童扶養手当などの福祉の世話になどならないと息巻いていた。しかし病気になった途端、親族のセーフティネットが脆弱な母は生活が立ち行かなくなった。それは新自由主義的合理性におけるプロジェクトの失敗例として福祉からの切り捨ての対象となり、生活保護窓口の市役所職員が顎で出口を指

し示したように、社会の外部に縛られ、死んでいったのである。その人生を「失敗」として記述することはたやすい。しかし、彼女が選び、抵抗し、ときに誇り高く生きた姿勢には、構造的支配には還元できない主体の輪郭が刻まれていた。社会学が個人史と社会的構造の相互作用を照らし出す営みであるならば、私の母の人生にもまた、その価値と意味が見出されなければならないのではないか。社会の外部に縛られた誰かが、もう一度自らにまなざしを取り戻す、社会学がそんな学問であることを私は信じたい。

2024年に京都産業大学で行われた日本社会学会創立100周年記念国際シンポジウムにおける基調講演で、国際社会学会会長のジェフリー・プレイヤーズ氏が披露したエピソードが鮮烈に印象に残っている。それは、ブラジルではスラムから毎年若者を社会学部に入学させるプロジェクトが動き出しており、現在、優秀な若手研究者を輩出しはじめていているという話だった。社会学というフィールドに、階層的により多様でさまざまな経験をもった研究者が集い、議論し、多くの知見を共有しあうことで、社会学はさらに豊かに発展していくことになるだろう。そしてその発展は、構造の閉塞にただ無力に回収されるだけでない、一人ひとりの確かに生きる／生きた人生の物語を照らし出す営為にもつながっていくはずである。

文献

- 浅野知恵, 1996, 『女はなぜやせようとするのか——摂食障害とジェンダー』 勁草書房.
- Berger, Peter L., 1963, *Invitation to sociology : a humanistic perspective*, London: Pelican Books. (水野節夫ほか訳, 1995, 『社会学への招待』 新思索社.)
- Brown, W., 2015, *Undoing the Demos: Neoliberalism's Stealth Revolution*. New Jersey: Zone Books. (中井亜佐子訳, 2017, 『いかにして民主主義は失われていくのか——新自由主義の見えざる攻撃』 みすず書房.)
- Butler, Judith., 1990, *GENDER TROUBLE :Feminism and the Subversion of Identity*, London: Routledge. (竹村和子訳, 1999, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社.)
- Fraser, Nancy., 2009, "Feminism, Capitalism and the Cunning of History", *New Left Review* 2:56 (関口すみ子訳, 2011, 「フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ」『法學志林』 109 (1) .)
- Friedan, Betty., 1963, *THE FEMININE MYSTIQUE*. London: Curtis Brown (三浦富美子訳, 1986, 『新しい女の創造』 大和書房.)
- hooks, bell., 1981, *AIN'T I A WOMAN Black Women and Feminism*, Boston: South End Press. (大類久恵

- 監訳, 2010, 『アメリカ黒人女性とフェミニズム ベル・フックスの「私は女ではないの？」』
明石書店.)
- 石原里紗, 1998, 『ふざけるな専業主婦』 ぶんか社
- 石原里紗, 1999, 『くたばれ！専業主婦』 ぶんか社
- Marx- Engels, 1848, *Das Kommunistische Manifest*. (金塚貞文訳, 1993, 『共産主義者宣言』大田出版.)
- Mills, C., W., 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford: Oxford University Press. (伊奈正人・中村
好孝訳, 2017, 『社会学的想像力』筑摩書房.)
- Minhha, Trinh T., 1991, *When the moon waxes red : representation, gender and cultural politics*, New York;
London: Routledge. (小林富久子訳, 1996, 『月が赤く満ちる時——ジェンダー・表象・文化の
政治学』みすず書房.)
- 三隅一人, 2025, 「社会関係資本から社会学的問いを鍛える」 三隅一人監修『大学院からはじめる
社会学研究——問いを鍛える作法』, pp.182-195.
- 見田宗介, 2008, 『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新書.
- 村田泰子, 2023, 『「母になること」の社会学——子育てのはじまりはフェミニズムの終わりか』
昭和堂.
- 妙木忍, 2009, 『女性同士の争いはなぜ起こるのか ——主婦論争の誕生と終焉』青土社.
- 西澤晃彦, 1995, 『隠蔽された外部』彩流社.
- 落合恵美子, 1994=2004, 『21 世紀家族へ ——家族の戦後体制の見かた・超えかた (第3版)』有
斐閣.
- 岡野八代, 2024, 『ケアの倫理——フェミニズムの政治思想』岩波新書.
- 酒井順子, 2003, 『負け犬の遠吠え』講談社.
- 里村和歌子, 2020, 『「作家さん」の労働的行為——主婦のハンドメイドと公共／家内領域の境界を
めぐって』『社会学評論』70 (4) 280 号, pp. 325-342.
- 里村和歌子, 2024, 「子育て主婦とキャリアの見通し」, 木戸功・松木洋人ほか編『日本の家族の
すがた——語りから読み解く暮らしと生き方』青弓社, pp.181-200.
- Spivak, Gayatri Chakravorty,. 1988, *Can the Subaltern Speak? In MARXISM AND THE
INTERPRETATION OF CULTURE*, Illinois: University of Illinois Press. (上村忠男訳, 1998, 『サバ
ルタンは語るができるか』みすず書房.)
- 鶴見俊輔, 1977=1994, 『ひとが生まれる』筑摩書房
- 上野千鶴子, 1990, 『家父長制と資本制 ——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店

上野千鶴子・小倉千加子, 2002, 『ザ・フェミニズム』 筑摩書房.

Willis, Paul., 1981, *E. Learning to Labor : How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, New York:

Columbia University Press. (熊沢誠ほか訳, 1996, 『ハマータウンの野郎ども』 筑摩書房.)

山崎明子, 2005, 『近代日本の「手芸」とジェンダー——』 世織書房.